アジアの博物館の歴史

鷹　野　光　行

1.　第2次世界大戦前の状況[1]

ヨーロッパ諸国で博物館の建設が盛んになり始めた19世紀後半、アジアの各地はほとんどがヨーロッパ諸国の植民地となっていた。1648年のバスコ・ダ・ガマのインドのカリカット到着によるインド航路の開通以来、ヨーロッパ人のアジアへの進出が進み、イギリスやオランダは東インド会社を作ってインドや中国、東インド諸島に入り込み、それらの地でも彼らの手になる博物館が設立されていく。博物館は植民地経営の中での役割を果たすために考えられ設立され、またアジアの新天地を探検・開拓していく博物学者たちによっても作られていった。

20世紀初頭におけるアジアの独立国は、アフガニスタン、イラン（ペルシア)、タイ、トルコ、日本などで、完全な植民地とならずとも、中国（清）のように海岸部や都市が半植民地化されていたところもあったが、独立国においては、ヨーロッパ諸国におけると同様に王室の所有するコレクションを収蔵・公開するための博物館ができている。アフガニスタンのカーブル博物館は1918年にすでにあり、イランの古代博物館は1925年のパーレビ王朝設立後に設けられている。タイのバンコク国立博物館は1874年にラーマ5世がラーマ4世のコレクションを王宮内に公開したのが始まりであり、その後現在の場所に移されて1926年に国立博物館として発足した。

旧イギリス領インドの各地には、アジアにおける最初の本格的な博物館であるインド博物館が1814年にカルカッタに設立されたのを始めとして、現在のインドには、1851年のマドラス州政府立博物館、1857年トリヴァンドラム博物館、パキスタンに1864年のラホール博物館、スリランカには1877年にコロンボ博物館、などが19世紀のうちに作られている。20世紀に入ってからは整備公開された遺跡に博物館が設置されるようになり、カジュラーホー考古学博物館（インド、1910年)、タクシラー考古学博物館（パキスタン、1918年)、サーンチー考古学博物館（インド、1920年)、パキスタンのモエンジョダロとハラッパーの考古学博物館（1925年と1926年）などがあり、他にパキスタンのペシャワール考古学博物館は1907年に、バングラデッシュのダッカ博物館は1913年に設立されている。

イギリスの植民地となっていた他の地域でも、インド各地と同様の観点から設けられた、マレーシアのサラワク博物館（1886年)、シンガポールのラッフルズ博物館（1887年)、があり、バクダッドのイラク博物館は1923年、イギリス人の手によって創立されている。

オランダ領東インドの大部分であった現在のインドネシアでは、オランダのハーレムにあるオランダ科学学院がインドネシアでの研究の場としてジャカルタ科学・美術博物館を作っている。1817年には現在でも熱帯植物研究の中心ともなっているボゴール植物園がオランダ政府の手によって作られ、1868年にはジャカルタ中央博物館が設立されたが、これらに先立って、17世紀後半にドイツ人の博物学者がセレベス島の東にあるアンボン島に自分の採集した資料を展示する私設の博物館を設けたことが明らかにされている（スリスティアシー　1995)。ヨーロッパ人がアジア各地へ探検や博物学調査のために入り込み、それぞれの採集した資料を展示する（並べておく）ごく小規模な個人による私設のものが、先に挙げたような国立・州立の博物館などに先立って存在していたであろうことは容易に想像できる。

同じアジアの日本の植民地とされた台湾には台湾省立博物館が1913年に設けられ、朝鮮半島では1915年の朝鮮総督府によって開かれた朝鮮物産共進会での美術館が翌年朝鮮総督府博物館となる。古都の慶州と扶余にはそれぞれ慶州分館（1925年)・扶余分館（1936年）が置かれた。これらに先立ち、日本に併合される前の1908年に最後の皇帝の純宗によって設けられた皇室美術館があって公開されていたが、これは総督府博物館の設立により李王家美術館と改名された。

中国は1840年に始まったアヘン戦争などを契機にイギリス、フランス、ドイツ、そして日本も加わっての侵略にさらされ、沿岸部は半植民地と化していたといってよかろう。博物館は外国人の生活の中心地であった上海にイギリス人の手による上海博物院（1874年)、フランス人による徐家匯博物院（1883年、後に1930年に震旦博物院となる）が作られたが、イギリス人やフランス人のそれぞれの社会の中でのものであったようで、一般に広く開放されたものとはならなかったとされる。他に天津に華北博物院(1904年、フランス人)、北彊博物院（1914年、フランス人)、済南に済南広智院（1904年、イギリス人)、などがあった。

1905年に、中国人の手による最初の公共博物館である南通博物苑が張謇によって設立され（宋伯胤、梶山勝訳　1986　p.25)、1912年には北京に最初の国立の博物館である国立歴史博物館が中華民国政府教育部によって設けられた。現在の中国歴史博物館の前身とされる。1925年には中国の博物館の発達史上重要な意義を有するとされる故宮博物院が成立している。これに先立ち、故宮には1914年に、清朝の審陽や承徳の離宮にあった文化財を運んで陳列する北京古物陳列所が文華殿と武英殿に置かれている。故宮博物院の所蔵資料はその後日本軍の略奪をおそれて各地に疎開し、やがて国民党軍と共産党軍の内戦を経て、大部分が台湾に運ばれて台北故宮博物院にあることは良く知られていることである。中国では1930年代は戦前の博物館が最も発展した時期とされる（表１)。

表１　1928年から1946年の中国の博物館数（王宏鈞編　2001『中国博物館学基礎』より）

年	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937
博物館数	10	34	27	34	53	68	74	62	77	42
年	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	
博物館数	37	37	23	31	20	18	8	12	17	

2. 第2次世界大戦後の博物館

第2次世界大戦終結後、1946年7月のフィリッピン共和国の独立や1947年のインドとパキスタンのイギリスの支配からの独立をはじめとして、アジア各地の欧米の植民地は1970年代はじめまでにほとんどが独立国となった。また香港やマカオもそれぞれイギリス・ポルトガルの統治を離れ中国に返還されたことは記憶に新しいところである。植民地経営の視点から経営され維持されていた各地の博物館も独立した各国の国立博物館となったものが少なくない。本項では、資料の制約もあり、中国と韓国の博物館について略述することとしたい。

(1) 中国の博物館

本項では、王宏鈞編　2001『中国博物館学基礎（修訂本)』、中国博物館学会編　1995『中国博物館志』に主に依拠して概略を述べていく。

中華人民共和国成立後まもなく、文化部文物事業管理局が人文系博物館を指導監督する部局となり、あわせて各省単位でも同様の機構が定められた。それとともに、「博物館事業の任務は革命の愛国主義教育の進行にある」（王宏鈞編　2001　p.102）として特に北京歴史博物館と故宮博物院に改造の重点を置き、前者では中国社会の発展の歴史を示し、後者は「帝農生活対比」、清代革命史料及び帝国主義の中国侵略史料の展示の場とした。

やがて1954年の山東省博物館を始めとする地方の博物館の建設も始まるが、それらは自然・歴史・社会主義建設の3部門を持つ総合博物館の形をとったものが多い。1956年4月には、第1回全国博物館工作会議が開催され、博物館の基本任務は「科学研究機関」「文化教育機関」「物質文化と精神文化の遺物・自然標本の収蔵場所」である、と明確化された。1960年代始め頃までに青海省とチベット自治区を除く各省自治区に博物館が建設されている[(2)]。また北京三大博物館とされる中国人民革命軍事博物館が1959年7月、中国歴史博物館と中国革命博物館が1959年8月にそれぞれ建設されていて、中国革命博物館は各地にこれに類似した革命記念館などが相次いで設けられ、博物館を革命教育の場として活用する、中国特有の博物館群を作り出すこととなる。

こうした中国の博物館の発展に水を差したのは1966年から76年に至るいわゆる「文化大革命」であった。この間、展示活動の停滞は言うまでもなく、閉鎖されたところも少なくなく、博物館の職員も下放されたものも多かった。その一方で、中国歴史博物館は中国国内の多民族の歴史を統一したものとしてこれを反映する通史展示により1973年10月に再開され、中国革命博物館が1975年におこなった「紅軍長征40周年紀年展示」には多くの人が詰めかけ大盛況を呈するという状況もあった。

1976年の文革終結後は、4つの現代化政策の中での展示や研究、収集保管方法、広報などについての博物館の役割の見直しを経て、博物館政策の基礎となる、1986年の「中華人民共和国文物保護法」をはじめ、「革命記念館試行条例」、「博物館蔵品管理辦法」「博物館安全保衛工作規程」などの法律や規則が制定され、各地に個人や私立も含む様々な単位で博物館が作られ、また秦始皇兵馬俑博物館（1979

年)、北京盧溝橋の中国人民抗日戦争紀念館（1987年)、四川省の自貢恐竜博物館（1987年）などの特殊な専門分野の博物館も設立された。陝西歴史博物館、上海博物館、浙江省博物館、山東省博物館、江西省博物館などの既存の博物館にも多くの資金が投入されて新館が設けられるなどの改造が図られている。また、貴州の上郎苗族村塞博物館（1986年）を始めとする、中国が多民族国家であることを反映した民族博物館も多く建設され、1997年までに５民族自治区と少数民族の多く居住する雲南・貴州・青海３省で500あまりを数えるに至っている。1999年末には、「文物系」の博物館は全土で1357カ所に及ぶという（表２)。

表２　文物系博物館数の変遷（中国博物館学会編　1995『中国博物館志』による）

年	1929	1936	1949	1952	1957	1980	1985	1990	1992
館数	10	72	21	40	72	365	711	1,013	1,106

1995年に出版された『中国博物館志』には、博物館・記念館・文物保護単位・科学館・民族級・植物園・動物園・自然保護区・各省や自治区の博物館学会が、台湾・香港・マカオを含め1,441カ所収録されている(3)。

小竹菁子が中国の博物館の特色のひとつとした、出土文物の考古博物館・古墳副葬品の展示館には「遺跡全体を大きく屋根で覆い、発掘現場をそのまま博物館にしてしまうような斬新な試み」（小竹菁子　1985　p.17）の博物館があり、先述の秦始皇兵馬俑博物館をはじめ、西安半坡博物館（1958年公開)、北京十三陵のうちの定陵博物館（1959年)、長陵（1985年)、昭陵（1990年)、浙江省の河姆渡遺址博物館（1993年)、湖北省の銅緑山古銅鉱遺址博物館（1982年）など、多くの人を引きつける存在である。

(2)　韓国の博物館

1945年９月に、国立博物館が朝鮮総督府博物館を引き継いで景福宮内に設けられ、慶州と扶余そして公州にその分館が置かれた。これらの分館は後に独立してそれぞれ慶州国立博物館・扶余国立博物館・公州国立博物館となり、1970年代には新築移転されている。地方の国立博物館はこのほかに「地域文化伝達の主要な役割を担う」場として、光州・晋州・清州・全州・大邱・金海・済州・春州にも設けられている。このように韓国では、地域による博物館に先行して国立の「地方博物館」を設置することにより、地域の博物館としての活動を促していると言えるだろう。

韓国の博物館事情のもうひとつの特色に、大学博物館の存在がある。尹容鎮によると、現在の高麗大学校に1934年、梨花女子大学校には1935年に博物館が設置されたという（尹容鎮　1995)。独立後の混乱した状況で、また朝鮮戦争の影響もあって、伝統文化を考える場としての博物館を設けられる状況になかなかならなかったこともあり、国立の博物館以外に大学にまず博物館を設置していくことが考えら

れ、1955年の大学の設置基準の中に博物館を置くことが盛り込まれ、1967年の大学設置基準の改定では博物館の規模まで定められた。しかし、1982年以後、博物館資料の入手が困難になるなどの理由により、博物館における教育の重要さは認められつつも次第に博物館設置の義務は緩和されてきており、国立大学以外は博物館の設置は義務ではなくなった。尹は90年代の大学博物館の役割を、①地域文化の、地方史、文化研究のコア、②大学教育のみでなく、一般市民の教育の場、③埋蔵文化財の調査機構の一つ、とまとめたが、このうち①と②に注目したい。「地方博物館」としての国立の博物館と共に、地域の博物館として社会教育の場としての役割を大学博物館も果たしているのである。日本では、国立の博物館よりははるかに地方自治体の設置する博物館の数が多いし、地域文化との関わりの上で果たす役割や社会教育の場での役割は非常に大きいものがあるが、韓国ではこの部分の役割を大学博物館も担っている、といえるのであろう(4)。

注

(1) この項は大部分を参照文献に挙げたものを参照して構成した。

(2) 河北省博物館（1953年)、内蒙古自治区博物館（1957年)、吉林省博物館（1952年)、安徽省博物館(1956)、福建省博物館（1953年)、江西省博物館（1961年)、など

(3) 目次で数えると1,453カ所あった。

(4) 日本の大学博物館の現状と比較して、大学の設置基準の中に博物館が義務づけられていたことを羨ましい思いで見ていたことがあるが、このような背景もあったのである。

＜引用・参照文献等＞

鶴田総一郎編　1979 『世界の博物館事典』 世界の博物館別巻　講談社

E.J.H. コーナー　1982 『思い出の昭南博物館』 中央公論社

佐々木進　1981 「3.　アジアの博物館」博物館学講座　第２巻　雄山閣

小竹菁子　1985 「世界の博物館」 網干善教・小川光暘・平祐史編　1985 『博物館学概説』所収　全国大学博物館学講座協議会関西部会

宋伯胤（梶山勝訳）1986 「中国博物館の歴史足跡―八十年の実践と理論―」名古屋市博物館研究紀要第10巻

スリスティアシー　1995 「インドネシアにおける博物館の変遷と課題」お茶の水女子大学人文科学研究科　平成６年度修士論文

尹容鎮　1995 「韓国の大学における博物館事情」全博協会報32　全国大学博物館学講座協議会（1994年10月22日、全国大学博物館学講座協議会東日本部会　平成６年度大会講演記録)

中国博物館学会編　1995 『中国博物館志』 華夏出版社

王宏鈞編　2001 『中国博物館学基礎（修訂本)』 上海古籍出版社

韓国国立中央博物館ホームページ　http://www.museum.go.kr/jap/inf/inf_3.html　2004.2.18